

# イラクサギンウワバの 有害動植物リスク分析

平成 24 年 2 月

横浜植物防疫所

## 第1章 ステージ1：イラクサギンウワバに関する有害動植物リスク分析の開始

### 1-1 開始：(開始するに至った問題の本質、目的)

イラクサギンウワバは現在検疫有害動植物として取り扱われているが、検疫有害動植物については、平成16年5月21日に公表された「植物検疫に関する研究会報告書」で「検疫有害動植物については、輸入植物の用途や輸送形態も考慮し、可能な限りリスクの定量的な評価を含めて、適時適切なPRA（有害動植物リスク分析）を実施し、それぞれのリスクに応じた措置となるよう検証し、対応していくことが適当。」とされた。

このため、イラクサギンウワバの有害動植物リスク分析を見直すこととした。

### 1-2 有害動植物リスク分析地域の特定

日本全域と特定する。

### 1-3 対象となる経路及び潜在的検疫有害動植物

#### 1-3-1 経路

イラクサギンウワバが発生する地域から輸入される寄主植物を経路と特定する。

#### 1-3-2 潜在的検疫有害動植物

イラクサギンウワバ（学名：*Trichoplusia ni* (Hübner)）を潜在的検疫有害動植物と特定する。

### 1-4 情報

生物学的な情報は、別紙のとおり。

### 1-5 開始の結論

検疫有害動植物の取り扱いについては、「植物検疫に関する研究会報告書」において、付着する植物の用途や輸送形態を考慮しつつ、随時適切な有害動植物リスク分析を実施する旨の指摘があったことから、有害動植物リスク分析を実施する必要性が生じた。

本種を潜在的検疫有害動植物と特定し、また、本種の発生国の寄主植物を経路と特定し、我が国全域を対象として、植物検疫措置に関する国際基準 No. 11「検疫有害動植物のための有害動植物リスク分析」に基づき、有害動植物リスク分析を開始する。

## 第2章 ステージ2：有害動植物リスク評価

### 2-1 植物検疫上の取り扱いに影響するイラクサギンウワバの特性等

#### 2-1-1 系統

植物検疫上考慮すべき系統に関する情報は見つからなかった。

#### 2-1-2 未発生有害動植物のベクター

ベクターとなることに関する情報は見つからなかった。

#### 2-1-3 日本での分布状況及び公的防除の有無

イラクサギンウワバは、日本全国に分布している。

本種は、公的防除の対象ではない。

### 2-1の結論

イラクサギンウワバは、日本全国に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物に対する被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。よって、有害動植物リスク分析は中止する。

別紙

和名	名	イラクサギンウワバ <sup>3)、4)、5)</sup>
学名	名	<i>Trichoplusia ni</i> (Hübner) <sup>1)、3)、4)、5)</sup>
英名	名	cabbage looper <sup>1)</sup>
分類	類	チョウ目 (Lepidoptera) <sup>1)、5)</sup> ヤガ科 (Noctuidae) <sup>1)、4)、5)</sup>

分布：(日本) 日本全国<sup>4)</sup>  
(世界) 新旧両大陸にわたりひろく温帯から熱帯に分布<sup>3)</sup>

寄主植物：アブラナ科、マメ科等の野菜類及びワタ<sup>1)</sup>

形態・生態：卵は円形又はわずかにドーム形で縦筋を有する。幼虫は5齢を経過し、初齢幼虫は白色透明で頭部は黒色だが、他の齢は緑色で、気門のすぐ背側及び背部に白色の縦線を有する。腹脚は3対でシャクトリムシ状に歩行する。蛹は最初、黄緑色で後に褐色に変わる。成虫は開張約40 mm、前翅の中央部に円形及びU字型の銀斑を有する。後翅は淡褐色。成虫は夜行性で活発に飛翔する。春に出現し、300～1,600個の卵を一つずつ植物上に産みつける。幼虫期間は通常、2～4週間。老熟幼虫は葉を綴り合わせた中で蛹化する。蛹期間は通常約2週間だが、冬はそのまま蛹で越える。年間の発生回数は3～4回。<sup>1)</sup>

被害：日本では個体数自体が少ないとされるが、<sup>3)</sup> 海外では収量及び品質の両面で損失をもたらし、特に気候が乾燥している場合に被害が大きくなるとされている。<sup>1)</sup>

ベクター・

系統：植物検疫上考慮すべき系統等が存在するとの記述はなく、日本未発生 of 有害動植物のベクターとなる旨の記述もない。<sup>1)、2)</sup>

防除法：野菜類、イモ類、豆類、花き類、観葉植物等においてイラクサギンウワバに対する登録農薬がある。<sup>6)</sup> 農薬に対する抵抗性の発達を避けるため、発生状況を監視し、必要な場合のみ農薬を散布することが最適とされる。<sup>1)</sup>

文献：1) CAB International (2011) Crop Protection Compendium. CABI.  
(<http://www.cabi.org/cpc/>)  
2) CAB International (2011) Plant Protection Database (1972-2011).  
Silver Platter International N. V. (<http://ovidsp.ovid.com/>)  
3) 井上寛・杉繁郎・黒子浩・森内茂・川辺湛 (1982) 日本産蛾類大図鑑 I. 講談社、東京：966pp.  
4) 九州大学大学院農学研究院昆虫学教室 編 (1999) 日本産昆虫目録データベース. 九州大学大学院農学研究院昆虫学教室.  
(<http://konchudb.agr.agr.kyushu-u.ac.jp/mokuroku/index-j.html>)  
5) 日本応用動物昆虫学会 編 (2006) 農林有害動物・昆虫名鑑増補改訂版. 日本応用動物昆虫学会、東京：387pp.  
6) 独立行政法人農林水産消費安全技術センター.  
農薬登録情報検索システム. (<http://www.acis.famic.go.jp/>)